

完璧御曹司はウブな許嫁いいなすけを愛してやまない

プロローグ 王子様と出会ったなら

物語のような素敵な奇跡を体験したいのなら、その秘策は簡単なこと。
心震わす素敵な物語を読んだ時、ここに描かれていることが、自分にもきつと起こると信じるこ
とだよ。

それは、二藤愛理にふたあいのが幼い頃、物流大手NF運輸の社長を務める父の浩樹ひろきから、幾度も聞かされた
言葉だ。

眠る前、幼い愛理に本の読み聞かせをする時、父はいつも必ずその言葉で締めくくった。
浩樹が自信を持ってその台詞せりふを口にするのは、貧しい家に生まれながらも、起業して一代で巨万
の財を成したという実体験からくるものなのかはわからない。

でも自分の今の生活が素敵な奇跡の積み重ねでできていると思っっているからこそ、浩樹は愛娘まなむすめの
愛理にそう繰り返して語っていたのだろう。

そして、父の言葉を信じていた愛理は、椿原賢悠つばきはらけんゆうに会った時、それが自分の身に起こった奇跡だ
と信じて疑わなかった。

端正な顔立ちに、濡羽色の髪、育ちの良さを感じさせる品のある身のこなし。彼の醸し出す雰囲気全てが、幾度となく読み聞かせてもらってきた物語の王子様そのものだった。

ただ、なにもかもが愛理の知る物語そのままというわけではない。

愛理が知る物語はどれも、完璧な王子様は、お姫様に永遠の愛を誓い結婚を申し込む。だけど、結婚の申し込みをされたのは賢悠の方だった。

五歳の愛理にとって、それは些細な違いでしかない。だから八歳も年上の賢悠に、心を込めてプロポーズの言葉を口にした。

「私が結婚してあげる。だから、一生分の約束をして」

一生分の愛や幸せ——物語の世界から抜け出してきた王子様なら、幼い愛理がうまく言葉にできないそういったものを与えてくれる気がした。

そんな愛理の言葉に、賢悠は驚きで目を丸くした。

でも次の瞬間、優雅な笑みを浮かべて床に片膝をつき、小さな愛理の手を取って「わかった。約束する」と、プロポーズを受け入れてくれたのだった。

そうやってNF運輸社長の一人娘である二藤愛理は、医療機器メーカー椿メデイカルの御曹司である椿原賢悠の許嫁になった。

この時の愛理はまだ幼く、世間というものがわかっていなかった。

このプロポーズはちっともロマンチックではなかったし、歴史ある名家の椿原にとって、成り上がりで蔑む二藤家の、しかも五歳の子供に「結婚してあげる」なんてプロポーズをされることが、

どれほど屈辱的なことだったのか。

それから二十年、二十五歳の分別ある大人になった愛理は、理解している。あの日の二人の約束が、まごうかたなき政略結婚だったと——

1 画面の向こうの王子様

——よく考えたら、五歳の私って、かなり怖いもの知らずだったよね……

六月末、文具メーカー・カクミのオフィスで、他の社員と一緒にタブレットを眺める愛理は、苦笑いをする。

「いや〜専務、完全に食われちゃってるな」

愛理の近くにいた男性社員も、苦笑いして自分の頬を擦る。

そんな彼に、愛理と仲のよい同僚である加賀春香が「芸能人じゃないんだから、関係ないでしょ。専務にそういうの求めるの可哀想だし」と、ツツコミを入れ、周囲の笑いを誘う。

そして同意を求めるように、愛理に腕を絡めて微笑みかけた。春香が頭を動かすと、パーマをかけたショートボブの髪から薔薇の香りが漂う。

愛理が曖昧に微笑むと、春香は視線を画面へと戻した。

その動きにつられて愛理も画面に視線を向ける。テレビ代わりになっているタブレット画面には、自社の専務を含めた四人の人の姿が映し出されていた。

小さなガラステーブルを挟んで左右に分かれて向かい合う四人の、右側に座る男女二人は軽妙な話術に定評があるタレントだ。そして左側に座る二人のうちの一人は愛理が勤めるカクミの専務で、もう一人は……

椿メデイカル副社長、椿原賢悠。

次世代の若き指導者に問う——昼の情報番組で月一回組まれるコーナーのゲストとして、自社の専務と自分の許嫁いいなずかが一緒に出るといっのはなかなかない偶然だ。

だからつい、二十年前、彼にプロポーズした日のことを思い出したりしたのだろう。

そんなことを考えながら画面を観ていると、近くの男性社員がまた苦笑いを零した。

「そうは言っても、見ろよ。ナポミンだって、さっきからもう一人のゲストにメロメロだよ」

ナポミンとは、女性司会者のあだ名だ。

彼の言うとおり、確かにナポミンは瞳を輝かせて賢悠にばかり話を振っている。

平日昼のこの番組を見ることはあまりないが、アイドルグループ出身の彼女は、周囲の空気を読みながらバランスよく話題を広げる印象があるので、この番組だけこういうスタイルということはないだろう。

「あれだけのイケメン御曹司を前にしたら、誰だって舞い上がるよな」

愛理に腕を絡めたままの春香が画面を覗き込んで「極上の男って感じだよね」と、恍惚こうこうの呟きを

漏らす。

賢悠が体を動かす度、彼が好んで着用しているイギリス織りのスーツの光沢こうたくが絶妙な変化を見せる。

画面にアップで映し出される賢悠の顔は、シャープな顎あごのラインが美しく、高い鼻梁びりょうに薄い唇、一重ひとえの切れ長の目がバランスよく配置されていた。

極上の男という表現がしつくりくる賢悠は、相手の話を聞き逃さないよう軽く首を傾け、目を細めているため、冷淡で切れ者といった印象を与える。それでいて、昼の番組で軽めの話が多いからか、質問に答える前に、はにかむような優しい微笑みを添えるのだ。

きりりとした苦味と極上の甘さを兼ね備えている上に、世界シェアを拡大している医療機器メーカーの御曹司ときている。

画面越しにも色気が伝わってくる極上の男を前にして、普段から華やかな人たちに囲まれている女性司会者も、理性を保つのは難しいらしい。

愛理たちですら、自社の専務ではなく賢悠のことばかり話題にしている。

「まあ、話題的にも、小学生女子をターゲットに可愛く便利な文具で売り上げを伸ばしたウチの会社より、一度は経営が傾いた医療機器メーカーを数年で立て直した椿原さんの話の方がドラマ性もあるし」

年配の男性社員が、フロア内に溢あふれる賢悠への羨望せんぼうと、専務への同情に満ちた空気を感じようとして口を開いたが、結局のところ、彼も専務に同情しているということだ。

「椿原さんは独身と伺いましたが、さぞ女性にモテるんでしょうね」

経営方針などの話が終わったタイミングで、ナポミンが明るい口調で切り出した。

口調は冗談めかしているが、目の奥が笑っていない。

思わず顔を顰める愛理の視線の先で、賢悠は質問を楽しむように顎のラインを指でなぞり、しばし考えてから口を開いた。

「どうでしょう？ 私の人生には関係のない話題ですから」

そんなことないでしょうとはしゃぐナポミンに、賢悠は肩をすくめる。そして長い脚を持って余すように組み替え、色気たっぷりに微笑んだのだ。

「私には許嫁がおりますので、他の女性を意識したことはないですね」

「婚約されているんですか？」

「ええ。二十年前に双方の両親が認めた女性がいます」

「……にじゅっ」

賢悠の言葉に、ナポミンはポカンと口を半開きにして、指折りなにかを数え始めた。おそらく当時の賢悠の年齢を確認しているのだろう。

そんな彼女の行動を見て、賢悠は人さし指を唇に添えて悪戯っぽい表情を見せた。

これは内緒の話とでも言いたげだが、生憎と彼の発言は全国ネットで放送されている。頭のいい賢悠がそのことを理解していないはずはないので、その仕草は彼流のジョークなのだろう。

茶目っ気たっぷりな賢悠の仕草に、愛理の腕にぶら下がる春香が甘い悲鳴を上げる。

「ねえ、聞いた？ 婚約者じゃなくて許嫁だって。今時、許嫁ってあるんだね！ さすが由緒正しなお家柄だね。物語みたい」

「痛いつ、痛いつ」

春香が腕にぶら下がったまま跳ねるので、愛理は肩を押さえて抗議する。

跳ねるのをやめた彼女は、キラキラした目で愛理を見上げた。

「あんなハイスペックな王子様の許嫁なら、やっぱり由緒正しい家柄のご令嬢とかよね。きつと私たちみたいにあくせく働いたりしないで、お茶とかお花とかピアノとか、花嫁修業とかやって過ごしているんだよ」

それに対して愛理は「ハハッ」と、乾いた笑いを漏らす。

許嫁という浮き世離れたワードに、春香は勝手な想像を膨らませているようだ。

そのご令嬢とやらに今ぶら下がってますよ。と、教えたらさぞや驚くことだろう。

ちなみにピアノは習っていたが、お茶とお花は最低限の基本知識があるだけだ。ついでに言えば、家は確かに裕福だが、由緒正しき家柄とはほど遠い。

そして大学在学中に就職活動をして、卒業と同時に社会人として働いている。何故そうしたかといえば、父を見て育った愛理としては、家柄は関係なく働けるのであれば働くことが正しいと思っているからだ。

—— 諸々、恥ずかしいから言わないけど。

考えなしの子供の頃ならいざ知らず、大人になり、それなりに分別が付いてくれば、こんな極上

の男と自分では、いかに不釣り合いであるかは理解できる。

それなのに彼は、未だ二十年前の約束を律儀に守り、愛理を許嫁として扱ってくるから対応に困るのだ。

「でも二十年前ってことは、子供の頃の話よね。そんな昔に親に結婚相手を決められるのって、嫌じゃないのかな？」

ナポミン同様、指を折りながら確認した春香が呟く。

「当人同士が納得しているなら、いいんじゃないかな……」

思わず返す声が小さくなってしまふのは、愛理にも思うところがあるからだ。

「そうだよ。椿原さんほどの男性なら、好きでもない人と我慢して結婚なんてしないよね。……ってことは、親の決めた許嫁を心から愛しているんだ。それってすごくドラマティック」

素敵な夢物語を想像して、春香がうっとりした声を漏らす。

「うん。そうだね」

一方愛理は、そうならいいのだけど……と、ため息を零してしまふ。

婚約してから二十年、椿メディカルの若きリーダーとして日々努力している賢悠と、のんびり生きてきた自分では、差がありすぎてなんととも言えない気持ち溜まっていく。

たまたま裕福な家に生まれただけで、愛理はこれといった才能もなく顔も知能も平々凡々。

それに、賢悠が自分に向ける優しさは、男女の愛情というより、年の離れた兄妹のような親しさでしかない。出会った頃と変わらない二人の關係に再びため息を漏らすと、二十年前の記憶が鮮明

に蘇ってきた。

二十年前のあの日。賢悠は、父であり、愛理の父・浩樹の大学時代の知人である昭吾に連れられ二藤家を訪れた。

当時から彼の容姿は完成されていて、上品な微笑みで挨拶をする賢悠の姿に、父と一緒に出迎えた愛理は、王子様か絵本の中から抜け出してきたのかと錯覚したのを覚えている。

当時中学生だった賢悠は、大人たちの話を待つ間、幼い愛理の遊び相手をしてくれていた。

後になって知ったことだが、由緒ある椿原の家は当時、昭吾の采配ミスで事業が傾き、資金援助をしてくれる相手を探していたのだという。銀行や他の企業から融資を受けるには経営陣の刷新が条件で、創業家のプライドがある昭吾はそれを受け入れられなかったらしい。

それで大学時代の知人であり、一代で財を築いた愛理の父の個人資産を頼って融資を求めに来たのだった。

そんな大人の事情を知るよしもない愛理は、話し合いの際、賢悠に遊び相手をしてもらい、素敵な王子様に仄かな恋心を抱くようになっていった。

昭吾が希望する金額がかなり高額だったこともあり承諾しかねていた浩樹は、ある日、冗談交じりに「将来、愛理を賢悠の嫁として椿原の家に迎え入れるのであれば、融資しても構わない」と提案したそう。

その提案に、昭吾は露骨に眉をひそめた。

そこで、融資の話と一緒にその提案もなかったことになるはずだったのに、たまたまその場に居合わせた愛理が、詳しい経緯もわからないまま賢悠を指さして「この人と結婚したい」と宣言してしまったのだ。

呆気に取られる大人をよそに、賢悠が愛理のプロポーズを受け入れたことで、融資と婚約が決まったのである。

そうして、愛理は椿原賢悠の許嫁いらいなかけとなり、経営危機にあった椿メデイカルは二藤家の融資で延命し、賢悠が経営に携たずさわるようになって見事復活し今に至るのだった。

「あ、いいなあ。専務、王子様と握手してる」

過去を思い出していた愛理は、春香の声で現実へと引き戻された。

画面に視線を戻すと、対談が終わったらしく、専務と賢悠が握手を交わしている。

拍手と共にカメラが引きになりコーナーが終わると、タブレットの持ち主である上司が画面を切った。

それを合図に、社員たちは散り散りに自分の持ち場へと戻っていく。

「後で専務に握手してもらおうかな……」

春香がそう呟いて、自分のデスクへと帰っていく。

腕を解放された愛理も、やれやれと自分のデスクに戻った。

席に着いても、そこかしこで先ほどの対談のことを話題にする声が聞こえてくる。その内容はや

はり、自社の専務ではなく賢悠かみに偏かたっているようだ。

そんな声にぼんやり耳を傾けながら、愛理の脳裏に春香がさつき口にした「椿原さんほどの男性なら、好きでもない人と我慢して結婚なんてしないよね」という言葉が蘇よみがえってくる。

この年になれば、愛理だって自分と賢悠の関係が不自然なものであることを理解していた。

おそらく父は、名家の椿原相手に無理難題を提案することで、融資を諦めてもらおうとしたのだろう。しかし、愛理が余計な一言を言ったばかりに状況は一変してしまった。

冷静に考えれば、当時中学生の賢悠が、幼い自分との結婚を喜んだわけがない。融資がなければ実家が立ち行かなくなることをわかっていたから、愛理の求婚に応じたのだろう。

それならそれで、実力で椿メデイカルの経営状況を回復させた今、賢悠が愛理と婚約関係を続ける意味はないと思うのだが……

賢悠は、今も変わらず愛理を許嫁いらいなかけとして大事に扱ってくれている。

クリスマスや愛理の誕生日といったイベントを欠かすことはなかったし、愛理が大学生になってからは、どれだけ忙しくても月に一度は愛理と過ごす時間を作ってくれた。

そして顔を合わせれば賢悠はどこまでも紳士しんし的に、それこそ完全無欠の王子様として優しく接してくれる。

そんな彼と過ごす時間はまさに至福の一言で、もし彼と結婚すれば、それこそお伽噺おとぎばなしのお姫様のような日々が待っているのだと思わせた。

なのに、このまま結婚に進むことを躊躇ためちってしまうのは、きつと自分に自信がないからだ。

——仲は悪くないけど、賢悠さんに愛されてる気がしないんだよね……
埋められない年齢差はどうしようもないけれど、彼の優しさが年の離れた妹に向けるもののように感じられてしまう。

——もう少し私が大人になれば、今よりいい関係になれるのかな。
どうすれば彼に見合った女性になれるのかと悩みつつ、愛理は眼前の仕事に意識を切り替えていくのだった。

午後四時を過ぎた頃、テレビ出演を終えた専務が会社に戻ってくると、再び社内にざわめきが始まった。何故なら先ほどテレビで同席していた賢悠を引き連れて戻ってきたからだ。

ギョツと目を見開き、思わず背筋を伸ばした愛理は、すぐに背中を丸めて彼に気付かれないよう身を小さくする。

突然の王子様の登場に色めき立つ女子社員たちに「話が盛り上がって」と、自慢するように語る専務の顔は、恋する乙女のごとく輝いている。

どうやら先ほどの対談で、賢悠に心を鷲掴みにされたらしい。

——まあ、それが椿原賢悠という人だけだ。

男女問わず、相手の心を惹きつけてやまない魅力が賢悠からは溢れ出ている。

それをカリスマ性と呼ぶのか、フェロモンと呼ぶのかは人によるけど、五歳の自分を一瞬で恋に落とした相手だからな、と一人納得する。

——こうして客観的に見ても、やっぱり賢悠さんって華があるな……

体を縮こまらせてパソコンの間隙から様子を窺えば、賢悠は熱っぽい視線を向ける女性陣に甘い微笑みを返しつつ周囲に視線を巡らせていく。

賢悠を応接室へと案内しようとしていた専務も、不思議そうに彼の視線を追ってキョロキョロと視線を彷徨わせた。

「……っ」

その動きに嫌な予感を覚え、愛理は体をより小さくさせる。だが、その行動がかえって目立ってしまったようだ。

一人だけ周囲と異なる動きをする愛理に気付いた賢悠が、顔を綻ばせる。

「——っ！」

こっちを見ないで。

視線でそう訴える愛理に、無情にも賢悠がよく通る声で言い放った。

「愛理、仕事が終わるまで待つてるから一緒に帰ろう」

「ッ」

次の瞬間、オフィスにどよめきが走る。と同時に、近くのデスクにいた春香が飛びつくようにして愛理の肩を掴んで「どういうこと？」と、騒ぐ。

肩をぐらぐら揺らされながら、その事態を引き起こした張本人へと視線を向けると、賢悠は楽しそうに目を細めて応接室へと入っていった。



車のハンドルを握る賢悠は、信号待ちのタイミングで助手席に座る許嫁の様子を窺った。

革張りのシートにちよこんと行儀よく座る愛理は、色白でふっくらとした輪郭をし、緩いウェーブのかかった栗色の髪をしている。子供の頃から彼女を知る賢悠は、彼女のその髪質が、色素の薄い瞳同様に天然のものであることを知っている。

大学に入った頃から急激に大人びてきた愛理だが、化粧でいくら印象を変えても小ぶりの鼻や形のよいハッキリした二重の目、ふっくらとした唇などに子供の頃の面影が残っていた。

唇を尖らせて窓の外に視線を向けていた愛理だが、賢悠の眼差しに気付くと、こちらを睨んでくる。

「なんでウチの会社にくるかな」

唸るようにそれだけ言うと、また唇を尖らせた。

感情が透けて見える愛理の表情に内心笑いつつ、賢悠は澄ました顔で返す。

「今日の対談相手が、偶然、愛理の会社の人だったんだ。だから、好奇心から会社訪問してみた」

その言葉は、半分嘘だ。

番組出演のオファーがあつた際、対談してみたい相手がいれば指名して構わないとのことだったので、敢えて愛理の勤めている会社を指名した。子供心をくすぐるマーケティング戦略について聞

いてみたい……と、もっともらしい理由をつけて。

何故そんなことをしたかと問われれば、愛理の働く環境が気になったからだ。

大学卒業後、家事手伝いや縁故就職という道を選択することなく、今の会社に就職を決めた愛理は、会えば職場でのことを楽しそうに話してくれた。

働くことが楽しくてしようがないと全身で語る愛理の姿を見るのは楽しいが、それと同時に、なんとも落ち着かない気持ちにもさせられる。

もしや、職場に彼女の心をときめかせる相手でもいるのではないかと勘ぐってしまい、口実ができたのをいいことに職場まで押しかけてしまった。

「賑やかな職場だな」

職場で女性の同僚とじゃれ合う彼女の姿を思い出しクスクス笑うと、彼女の眉間に皺が寄る。

「あれは、賢悠さんのせいです」

「俺の？　なんで？」

信号が青に変わりアクセルを踏む賢悠の横で、愛理が深いため息を漏らした。

「テレビの向こう側の存在だと思っていた人が、突然こちら側に現れたんだから、大騒ぎにもなるでしょ」

「なんかそういうホラー映画あつたな」

目尻に皺を作ってしまうと、愛理が眉根を寄せる。

「それ、絶対私が言ってる状況じゃない」

そんな愛理の表情を横目で窺い、賢悠は頬を緩めた。

本人は気付いていないのだろうけど、愛理の感情は彼女の唇を見ていればわかる。不機嫌そうに唇を引き結んではいるが、唇の端に小さなえくぼができていてるので、本気で怒っているわけではない。

言いたいことを言えば機嫌が直ることも承知しているので、むくれる愛理をしばらく放置していると、拗ねるのに飽きた愛理がこちらをチラチラ窺い始める。

「なんだ？」

「今日のアレ、わざと言ったの？」

「アレ？」

と、とぼけてみせるが、もちろん賢悠には愛理が言わんとしていることはわかっている。

「許嫁がいるって、口を滑らせたっていうより、敢えて話題にしたみたいに見えたから」

——相変わらず、変なところで鋭いな。

密かに感心する賢悠に、愛理が言葉を重ねる。

「全国放送のテレビで突然あんなこと言って、賢悠さんに怒られたんじゃない？」

愛理の言う賢悠さんとは、鷺坂紫織という賢悠の第一秘書のことだ。

「ああ……、すごく怒ってた」

その時のことを思い出し、賢悠は癖のある笑みを浮かべて頷く。

秘書の鷺坂は、鷺坂汽船という海運会社の社長令嬢で、今年から賢悠の第一秘書になった女性だ。

彼女の雇用を決めたのは賢悠の父、昭吾で、これまで働いたことのなかった彼女を賢悠の秘書として雇い入れた理由を「社会勉強のため頼まれて預かることになった」と説明した。

だが、その目的が別にあることはお見通しだ。

時代錯誤なまでに血筋や家柄にこだわる昭吾は、椿メデイカルが経営を立て直した今、どうにかして二藤家との婚約関係を解消し、鷺坂の娘を嫁に迎え入れたいと考えているのだろう。

プライドの高い昭吾にとって、融資のために決まった息子と愛理の婚約は恥ずべき過去だからだ。そんな昭吾の意向を理解しているためか、鷺坂は長年、賢悠の秘書を務めている斎木守を第二秘書として扱い、肩書きだけの第一秘書にもかかわらず高飛車で傲慢に振る舞っている。

もつと言えば、二人の婚約関係に不満を抱いていた昭吾に、鷺坂があれこれ入れ知恵してそのかしたことも承知していた。

鷺坂にいいように踊らされている父の姿を見るのは気分がいいものではないし、大した仕事もせずに我が物顔で振る舞う彼女の存在は不快でしかない。

会社で顔を合わすだけでもうんざりする女を、どうして妻として迎え入れたいと思うものか。第一自分には、二十年も前に結婚を誓った相手がいるのだ。その事実を変えるつもりはない。

父や鷺坂にその事実を自覚させるために、敢えて許嫁の存在を公の場で口にしたのだ。

その結果は、愛理の予想どおり鷺坂を激怒させたが、賢悠の知ったことではない。

収録直後、鷺坂はヒステリックに文句を言うだけでは飽き足らず「業績が低迷しているNF運輸に、早く見切りをつけるべきだ」とか、よく知りもしない愛理のことを「成金の親に溺愛された傲

「慢な娘」などと言いつつ放った。

声のボリュームこそ抑えていたが、人目のある場所で上司に対し感情に任せて文句を言うに留まらず、その許嫁をも批難する。

その振る舞いになんかの疑問も持たないで、なにが社会勉強だ。

三十歳まで社会に出す気もなく箱入りで育てた娘を知人の会社に好待遇で預けて、なにを勉強できるといえるのか。

——そもそもウチは託児所じゃない。

鷺坂の態度を思い出し、眉をひそめる。

「そんなに叱られたの？」

無言になった賢悠へ、愛理が気遣わしげな声をかけてくる。

鷺坂ごときの言葉に、自分が傷付くわけがないのに、なにを想像してなにを心配しているのだから。そう呆れると共に、くすぐったい気持ちにもなる。

八歳年下の彼女は、賢悠からすれば庇護すべき存在なのに、彼女の方はそうは思っていないらしく、いつも真剣にこちらの心配をしてくる。

「心配してくれてありがとう」

素直にお礼を言うと、愛理が恥ずかしそうにそっぽを向いた。

その姿を微笑ましく思っていると、愛理がすぐはこちらに視線を戻して聞いてくる。

「もしかして、私が仕事をしていると迷惑になる？」

「……？」

急になにを言い出すのかと思ひ、軽く眉を動かして尋ねると、愛理が気まずそうな顔で続ける。

「就職の報告をした時、椿原のおじ様、あまりいい顔していなかったから。……賢悠さんも、なにか気になることがあったから、私の職場を確認しに来たんじゃないですか？」

「ああ……」

確かに昭吾は、一般学生に交じって就職活動をし、勤勉に働く愛理のことを、椿原の嫁として体裁が悪いと不満を漏らしていた。

だが賢悠としては、家柄に驕らず、自分で自分の道を切り開く愛理を好ましく思う。

「確かにどんな職場で働いているかは気になるよ。自分の許嫁の職場に興味を持つのは当然だろう？でも専務をはじめ、いい人が多そうな職場で安心したよ」

賢悠の言葉に、愛理がわかりやすく顔を綻ばせる。

「うん、いい職場だよ」

自慢げに頷く愛理に、賢悠も満足げに頷く。

「どうやら自分の心配は杞憂に終わったようだし、ついでに愛理の職場に自分の存在を印象付けることもできた。」

「……？」

そっとほくそ笑む賢悠の表情に、愛理が不思議そうに首をかしげた。

愛理の職場で愛理にマーケティングできて一安心。そんな自分の大人げない打算を誤魔化すように、

賢悠が尋ねる。

「就職といえば、それこそ浩樹さんは、愛理が働くことになにか言わなかったのか？」

「なにかって？」

愛理がなにを言われているのかわからないという顔をした。

「お前の行ったた大学、卒業後の進路は、圧倒的に『家事手伝い』が多かっただろう？」

愛理はああ、と納得した様子で頷く。

「別になにも。ウチの教育方針は『自分が正しいと思う方に進みなさい』だから、大学まで出してもらったし、働こうと思った。それで就職したんだけど、大学で就活するって言ったら、確かに変な顔をする人もいたかも……」

当時を思い出している様子の愛理に、思わず笑ってしまう。

「俺も浩樹さんの意見に賛成だよ。俺は愛理の選択を信じている」

「よかった」

「だから結婚後も、愛理が仕事を続けたいなら、周囲の言葉なんて気にせず続けてほしいと思ってる」

何気なく口にした賢悠の言葉に、愛理が驚いた顔をする。

その驚きの意味を知りたくて視線で問いかけると、愛理が戸惑い気味に言う。

「結婚なんて言葉、賢悠さんから初めて聞いたから」

「愛理が大人になるのを待ってたんだよ。今さら結婚を急ぐ仲でもないし」

「……そっか」

五歳で自分の許嫁いひなせかけとなった彼女は、二十年という年月を重ねて随分大人びたと思う。

それでも喜怒哀楽を素直に顔に出すところはそのまま、彼女が健やかすこな心のまま成長したのだとわかった。そんな愛理の前でなら、自分も無駄に感情を隠す必要はないのだと思える。

両親から惜しみない愛情を注そそがれて育った彼女には、一緒にいる人の気持ちも明るくしてくれる素直さがあった。

——我が家とは大違いだ。

賢悠の父である昭吾が大切に思っているのは、名家の当主であり椿メデイカルの創業一族という我が身の保身だけだ。

自分を第一に考える昭吾にとって、結婚も家族も保身のための道具でしかない。

言動の端々はしはしにそれを滲ませ常に傲慢うごまんに振る舞う父は、散々二藤家を成り上がりで軽んじておきながら尻尾しっぽを振って融資を頼みに行く。それでいて陰では「この私に金を貸してやっただと思ってる」と憤慨しているのだから、とことん歪ゆがんだ価値観の持ち主だと思える。

そして父に従う母もまた、特権意識の強い人だ。

そんな両親を見て育ち、夫婦や家族に冷めた価値観を持っていた賢悠にとって、両親に無償の愛を注そそがれた天真爛漫てんしんらんまんに育った愛理はひどく新鮮なものに映った。

愛理と一緒にいると、自分の家では感じたことのない安らぎを覚え、心が癒いやされるようになった。

「俺は、早く愛理と家族になりたいよ。浩樹さんにも、そのことを伝えておいてくれ」
その言葉に愛理が赤面する。

きっかけは確かに打算だった。けれど、幼い頃からずっと、自分を慕い続けてくれる愛理を大事にしたいと思う。

二十年前、五歳の彼女がした決断が、正しいものであったと証明するために。

2 笹に願うこと

賢悠の突然の会社訪問から十日ほど過ぎた週末。

いつもは下ろしていることの多い髪を綺麗に結び上げ、爽やかな若菜色の単衣ひとえの着物に乳白色の薄い色合いの花の文様が入った名古屋帯を合わせた愛理は、父の浩樹と共に椿原家を訪れていた。

「結納をする時も、こんな感じなのかな」

門から玄関まで続く石畳を歩く浩樹は、ふと足を止めてしみじみとした口調で呟く。

ここしばらく仕事が忙しらしく、あまり家で顔を合わせなかった父の感慨深げな表情に、愛理は首筋の後れ毛を撫でてはにかむ。

「気が早いよ」

賢悠に「早く家族になりたい」と言われたことを告げてから、浩樹もだいぶ覚悟ができてきたら

しい。

苦笑する愛理に、浩樹はそんなことはないと言を振る。

「だけどこの前のテレビの発言は、各所で波紋を呼んでいるぞ。椿原家の御曹司がいよいよ結婚するんじゃないかと騒がれている」

実はカクミの社内でも、賢悠の発言とそれに続く突然の会社訪問で、愛理の素性や賢悠との関係がかなりの話題を呼んでいる。

浩樹の会社の関係者でもあの放送を見ていた者は多く、気の早い者の中には、結婚の日取りを確認してくる者もいたそうだ。

そんな周囲の空気を肌で感じ、愛理自身、二人の関係が結婚へ向かっているのだとじわじわ実感してきた。

まだまだ未熟な自分に、彼の妻の役目が務まるだろうかという不安はある。それでも二人の結婚を心待ちにしてくれている賢悠の言葉を聞いて、愛理自身も覚悟を決めた。

——賢悠さんと結婚……

あれこれ想像して気恥ずかしさから視線と落とすと、浩樹の足下に濃い影が落ちているのに気が付く。

そのまま視線を上げると、浩樹が目尻に皺しわを寄せてそっと笑った。

どこか疲れて見える父の表情に、ふと老いを感じてしまう。

「お父様、疲れてる？」

思わず漏れた愛理の言葉に、浩樹が困ったように首筋を摩る。

「普段の仕事に加えて、九月にはNF運輸の創業三十周年記念イベントの準備もあるから、少しな愛理の結婚準備が始まれば、さらに忙しくなるだろうから体には気を付けるよ」

浩樹にとつて愛理は遅くにできた子供で、同世代の友達には既に孫のいる人も多い。浩樹としては、そろそろ娘に結婚してほしいのかもしれない。

本人の自主性を重んじる教育方針の父は、賢悠との結婚のタイミングも二人の判断に任せる姿勢でいてくれたが、内心では気を揉んでいたのだろうか。

もしそうなら申し訳ないと眉尻を下げる愛理に、浩樹は柔和な笑みを浮かべた。

「今日の茶会でその話が出るかもな」

そう呟いて、立ち止まっていた足を動かす。

京都の公家の流れを汲む椿原家では、五節句の時期に、親しい人だけを招いて気楽な茶会を開く慣習があった。七月頭の日曜日である今日は、七夕の節句を名目に茶会が開かれる。

気楽と言いつつ、京都でも減少傾向にある配膳司を呼び茶を振る舞う格式高い茶会だ。

大きな茶会の席で、主催者の目が行き届かず失礼が起きないようにと雇われる配膳司は、客人の誘導に始まり、給仕や進行、帰る際のお見送りといった全てを取り仕切るプロだ。

そんな配膳司を配しての茶会は客も厳選されていた。特に政財界の者にとつて、椿原家のお茶会に招かれるということは一つのステータスとなっている。

二藤親子は、愛理が成人したのを機に、賢悠の婚約者として毎回招かれていた。

「ごめんください」

カラカラと軽快な音を立てて横に滑る和風建築の玄関扉を開くと、三和土には既に数人分の靴がある。

先客の履き物から、和装か洋装か、男女のどちらが多いか、そんなことを想像していると、長い廊下の奥から紋付き袴の白髪の男性が姿を見せた。

「二藤様、お待ちしておりました」

小柄だが姿勢が良く存在感のあるその男性は、配膳司の浅井だ。

初めて顔を合わせた時から一度たりとも二藤親子の名前を呼び間違えたことのない浅井は、愛理たちだけでなく、茶会の出席者全ての顔と名前を把握している。

「せっかく年に一度、織姫はんと彦星はんが互いの思いを確かめる日やと言いますのに、今日は少し、雲行きが怪しいようです……」

玄関まで歩み出て床に膝をついた浅井が、齒切れ悪く出迎への挨拶をする。

彼の何気ない台詞に、愛理は違和感を覚えた。

確かに外は少し曇っているが、夜になっても星が見えないというほどではない。

それに普段の浅井なら験の悪い言葉を嫌い、星が見えなくても「二人が恥ずかしがって雲に隠れている」とでも言いそうなものだが。

内心首をかしげながら、先を歩く浅井についていく。

そして違和感の理由を、愛理は茶会の前室に通されて理解した。

浅井に案内されたのは、茶会の際、お茶の前に皆で懷石わいせきを食べるのに使う広い和室だった。

「二藤様がおみえになりました」

廊下に膝をつき、丁寧な所作で襖ふすまを開く。

黙礼してそっと立ち上がる浅井に続いて、浩樹、愛理の順で和室に入ると、部屋には左右それぞれに十席のお膳が用意されており、七人の人がそれぞれに割り当てられたお膳の前に座っている。

浩樹は顔なじみの数人に親しげに挨拶あいさつし、当然のように上座へ足を向けようとして、浅井とぶつかった。

賢悠の婚約者である二藤親子はこれまで、正客しょうきやくとして上座の主賓席に案内されていた。それもあつて、案内を待たずに浩樹の足が動いてしまったようだ。

戸惑う浩樹に、浅井が落ち着きのある声で詫げる。

「亭主より、本日は同業者同士で話しやすい席をとの指示がありました……」

同業者同士と言われても、運送業界の招待客は浩樹だけだ。

「早とちりして申し訳ない」

恐縮する浅井の肩を軽く叩いて、案内される下座の席へ足を向けた。父の後に続く愛理は、さっきの浅井の言葉を中心に反芻はんじゅうする。

つまりこれは、愛理と賢悠を離すための席なのだろう。

いよいよ結婚に向けて動き始めたと思つた矢先、自分と賢悠の仲を邪魔するような仕打ちに、指

先から血の気が引く。

自分との結婚を望む賢悠の言葉に、嘘があつたとは思わない。お互いの気持ちがか確かなのだから、時期がくればおのずと結婚に進むと思つていた。

突然の不穏な気配に、これはどういうことだと考えている間にも、次々と新たな招待客が自分の席へと案内されていく。

一部屋へ入つて来た客は皆一様に、下座に座る二藤親子に小さく驚く。その後に見せる表情が、素直な哀れみか、微かな嘲笑あざわらひかは人によつてだ。

その視線に居心地の悪さを感じていると、賢悠が秘書の鷺坂を従えて入室してくる。

愛理たちが下座に座っていることに気付いた二人の表情は、わかりやすく分かれた。

目を見開き驚く賢悠と、目を細めて口角を上げる鷺坂。

賢悠の秘書である鷺坂が、この席に招待されるのは初めてだ。深い紺色の着物を隙なく着こなす彼女の姿は華やかで、こういつた場所への気後れを感じない。

その時、浅井がそつと賢悠になにかを耳打ちする。おそらく今日の座席の事情を説明しているのだろう。

一言二言交わし、二人は正客しょうきやくの座る席と向き合う席へ案内された。

歩きながら、自然に鷺坂が賢悠の肘へ手を触れさせた。その光景を見つめる愛理は、膝の上で揃えていた手で拳こぶしを作る。

——どういふこと……

まるで自分が婚約者であるように賢悠に寄り添う鷺坂の姿に、愛理は混乱してしまう。寄り添う二人の姿が様になってるだけに、ざらつく心を抑えられない。

「……っ」

チラリと右隣に座る父の方を見ると、硬い表情をした彼の喉仏が上下した。父もこの状況に、ただならぬものを感じているに違いない。

自分と賢悠の間に突然垂れ込めた暗雲に、背中に嫌な汗が流れ出す。

すると、上座へ案内されたはずの賢悠が浅井を伴いこちらへと近付いてきた。

「……っ！」

何事かと周囲が見守る中、賢悠は既に着席していた愛理の左隣の男性に小声で話しかけた。

一番末席に座る左隣の彼は、二期目の当選に向け、票集めが忙しい若手政治家だ。

そんな彼は、突然賢悠に話しかけられた緊張からか終始中腰で話をしている。しかし、不意に表情を明るくし深くお辞儀をして立ち上がった。

愛理たちにも頭を下げると、彼は浅井に案内されてその場を離れていく。浅井は、チラリと愛理に視線を向け、控え目な微笑みを浮かべて小さく頷いた。

一連の流れを呆気にとられて見守っていると、空いた席に賢悠がどかりと腰を下ろす。

「えっ？」

驚いて目を白黒させていると、隣席に座っていた彼は上座の鷺坂の隣に座った。

どうやら賢悠は、政治家の彼に席の交換を申し出たようだ。

茶の席で配膳司の案内を無視して好きな場所に座るなんてマナー違反もいいところだし、普段の賢悠ならそんなことはしない。

「いいの？」

思わず声を潜めて確認する愛理に、賢悠は悪戯を成功させた少年のようにクシャリと笑う。

「彼は今、新たな人脈作りに奔走しているようだから、こんな隅にいるより上座で存在感を「示すべき」と助言したら、喜んで代わってくれた」

「そうじゃなくて、賢悠さんは上座にいないと……」

「茶の席で仕事の話をするなんて無粋だ。別のことに気を取られた亭主が失礼をしないよう、息子として末席から場の進行を見守ることにした……って、ことにしてもらった」

「でも……」

大丈夫だろうかと心配する愛理の顔を覗き込み、賢悠が言う。

「大丈夫だから、お前はなにも心配しなくていいよ」

あれこれ考えてしまう愛理をよそに、賢悠は少し体を前に屈め彼女の向こう側に座る浩樹に話しかける。

「先日のテレビでのインタビュウの件で、私が父の機嫌を損ねてしまったようです。そのせいで、二藤さんのメンツを潰すような形になってしまっ……」

賢悠の言葉に、浩樹は納得したと頷く。

「なるほど。椿原君は、形式にこだわる人だ。自分の流儀にそぐわないことが、嫌なのだろうね」

「自分と違う価値観を認められないだけです」

どこか冷めた表情で呟く賢悠を、浩樹が優しく諭す。

「だが、自分の価値観をすっかり持った人だ。ある意味、揺るぎない信念の持ち主ともいえる。……それに、もし父親のそういう姿勢に賛同できないのであれば、君は自分と違う価値観の人を認められる心を持ってほしい。手始めに、彼の価値観に理解を示してやってはどうだい？」

浩樹の言葉を聞き、賢悠は目尻に皺を寄せて苦笑する。

「私はいい義父に巡り会えて幸運です。おかげで道を誤らないで済む」

賢悠の表情が解れたのを見て、浩樹も目尻に皺を寄せて笑う。

「椿原君は、学生の頃から自分の流儀に反するのを嫌う人だった。また、自分で交わした約束を違えるようなことはしない律儀な性格をしている。私は、そんな彼が嫌いじゃないよ。だから、愛理と賢悠君の結婚に関しても、あまり心配はしていないんだ」

気を悪くするでもなく浩樹は穏やかに頷く。だがすぐに物憂げな様子で「ただ椿原君は、今はタ イミングが悪いと思っているのかもしれないね」と、付け足した。

その言葉に賢悠も控え目な声で「訴訟の件でしたら、私は気にしていません」と、返す。

「……？」

なにか含みを感じる言い方が気になったが、人の目が多いこの場で質問は控えるべきだろうと思 い直す。

後で浩樹と賢悠のどちらかから事情を聞こうと考えていると、浩樹と賢悠は愛理を挟んで雑談を

始める。賢悠と話しているうちに、浩樹の硬かった表情が柔らかくなるのがわかった。

愛理にはあまり興味のない話で聞くともなく耳を傾けていると、徐々に客が席を埋めていく。そ して全ての席が招待客で満たされると、襖が音もなく開き、着物姿の昭吾が現われた。

昭吾が室内に足を踏み入れると、座敷にピリリとした緊張が走る。そんな空気の中、昭吾は末席 に座る賢悠に気付き眉をひそめた。

すかさず歩み寄った浅井が耳打ちすると、昭吾は愛理へと鋭い視線を向けてくる。

「……っ」

昭吾の鋭い眼差しに、思わず身がすくむ。

これまで向けられたことのない鋭い眼差しを見て、自分を取り巻く環境の変化に不安が込み上げ てきた。

愛理から視線を逸らした昭吾は、何事もなかったように着席すると、招待客へ季節の言葉を織り 込んだ挨拶を述べていく。

その後は、懐石料理をいたたき、茶室に移動しての茶の振る舞い。それが終わると、招待客は品 よく手入れされた庭園の散策を始めた。

都内とは思えない広い日本庭園に出ると、七夕の節句ということで笹と短冊が用意されていた。 思い思いの願い事が笹の先でなびいている。

「二期当選……誰が書いたか、すぐにわかっちゃう」

揺れる短冊の願いを見上げ、自分もなにか書こうかと思っていると、背後に人の気配を感じた。

「他人の願いを盗み見るなんて、育ちの程度が透けて見えるわね」

あからさまな棘のある声に振り向くと、背の高い艶のある女性が薄笑いを浮かべて佇んでいた。

「鷺坂さん……」

口は微笑みの形を取っているが、その瞳の奥に暗い闇を感じる。

鷺坂とは面識があり、好かれていないとは思っていたが、今日の彼女はやけに攻撃的だ。

「これだからメツキ細工のお嬢様は駄目ね」

「素直な願い事ばかりで、ここに人目を避けるような願い事はないですよ」

彼女の態度に思うところはあがるが、賢悠の秘書との間に波風を立てないよう笑顔で返事をする。

愛理の隣に立った鷺坂は、目に入った短冊に手を伸ばし、そこに書かれてある願い事を眺めて鼻で笑う。

「くだらない」

「……」

短冊を読んだ自分を非難しておいて……と、思わず眉根を寄せてしまう。そんな愛理に、自分だけはそれが許されていると言いたげに、鷺坂が高飛車な声音で言う。

「私なら、自分の願い事を人任せになんてしない。欲しいものは、自分で取りに行くわ」

挑戦的な笑みを浮かべ、鷺坂は愛理へ向き直る。目に入ってきた彼女の帯留めに、愛理は小さく眉をひそめた。

紺色の着物をお洒落に着こなす鷺坂の帯留めは、彫金細工の椿だ。大ふりで凝った作りのそれは、かなり人目を引く。

本来、冬に使うべき椿の花を、夏の着こなしに取り入れている。これだけ隙なく着物を着こなす彼女が、小物選びを間違えるはずがない。

「……っ！」

賢悠がこちらを気遣って席を移動しなければ、彼女は上座に座る賢悠の隣で、椿原の苗字を表した椿の飾りを身につけて座っていたことになる。

その光景を見た茶会の参加者は、それをどう受け止めるだろうか……

不快な感情が、一気に自分の内側を黒く満たしていく。

「……っ」

「あら、いい顔」

平静を装い唇を固く引き結ぶ愛理を見て、鷺坂が満足げに微笑む。

その意地の悪い表情は、心の底から愛理を見下したものだ。

ここまで露骨な蔑みの眼差しを鷺坂から向けられるのは初めてだが、伝統あるお嬢様学校に通い「成り上がりの娘」という扱いを受けていた愛理には、見慣れた視線でもある。

——良家の子女が皆、こんな傲慢な人ばかりじゃないのはわかってはいるけど……

愛理の学生時代からの友達には、歴史ある家の生まれの子もいれば、自分同様一代で財を成した家の子供もいた。皆、気さくな人ばかりで、鷺坂のように家柄で人を見下すことはしない。

だから傲慢さは生まれがそうさせるのではなく、その人自身の問題だ。理不尽な蔑みにこちらが小さくなる必要はないと、顎を引いて胸を張る。そんな愛理にわざと肩をぶつけるようにして、鷺坂は新しい短冊が置かれている台へ歩み寄り、硯の墨に筆を浸す。

「貴女程度のお願いなら、短冊に書くのが丁度いいのかもしれないわ」

そう言つて、鷺坂は滑らかな筆遣いで『遼東の冢 無事に小屋に帰る』と書き記し、愛理に意地悪く微笑みかけてきた。

「遼東の冢」とは、世間知らずで得意になり、独りよがりになっていることや、そのような人だとえだ。つまり、この場所に相応しくない愛理は、帰れということだろう。

敢えてあまり知られていない故事を使い、愛理が理解できなければ「成金の娘は教養がない」と、嘲るつもりなのが透けて見える。

だが、生憎愛理は文学部卒だ。

「あら意外。字は読めるのね」

鷺坂がつまらなそうに鼻を鳴らし、愛理に硯と筆を譲るよう体を動かす。

そして、ことさら意地の悪い笑みを浮かべて囁いた。

「貴女の場合は、NF運輸が倒産しないよう願った方がいいんじゃないかしら」

「……なっ！」

思いがけない鷺坂の言葉に振り向くと、鷺坂が大袈裟に目を見開いて驚いてみせた。

「あら、自分の親の会社が風前の灯火だつてこと、知らなかったの？」

バカにしたような鷺坂の表情を見て、愛理の脳裏に最近忙しそうにしていた父の姿が思い出される。

「嘘……です」

否定する愛理を、鷺坂がせせら笑う。

「絵画の件、相当響いているみたいよ」

鷺坂の言葉に思い当たるものがある愛理は、口を噤んだ。

「怖いもの知らずの無知な冢は、勢いだけで一気に高みにのぼるけど、転げ落ちるのも早いわね。椿原の歴史をお金で買ったつもりかもしれないけど、身のほど知らずは素直に消えなさい」

冷淡な声色でピシヤリと言い放ち、鷺坂は愛理の返答を待たずにその場を離れていく。

その後ろ姿を見送った愛理が、ぼんやり風に揺れる短冊を見上げていると、鷺坂と入れ替わるように背後に人が立つのに気付いた。

鷺坂が戻ってきたのだろうかと警戒して振り向くと、そこには長身の痩せた男性が立っていた。

「椿原のおじ様……」

愛理の言葉に、昭吾がそつと眉をひそめる。

それでもすぐに表情を整え、笹の枝を指で引き寄せ、そこに書かれている願い事を眺めて目を細めた。

「鷺坂君に、虐められたかな？」

愛理と視線を合わせることなく、昭吾が問う。そして愛理の答えを待つことなく、独り言のよう

に続けた。

「すまないね。彼女は息子を慕^まっているんだが、君がいるせいで結ばれることはない。八つ当たりの一つもしたくなってしまうんだろ」

「……」

こともなげに言う昭吾は、そこでようやく愛理と視線を合わせ、肩をすくめてみせた。

「家柄的にも会社的にも、鷺坂の娘が嫁になった方が椿原のためだと鷺坂君は言っていた。君には申し訳ないが、私もそう思っているよ」

突然の話に、絶句してしまう。

大人になるにつれ自分が椿原の嫁として歓迎されていないことは、なんとなく感じていた。それは、性格や学歴といった努力してどうにかなるものではなく、椿原家のように遡^{さかのぼ}れる歴史がない家の生まれであることが原因なのだろう。

そのことに気付いてはいたが、家柄を理由に身を引くのは自分で自分の家族を卑^{ひげ}下するように思えて、したくなかった。

確かに父は、なんの歴史もない貧しい家の出だ。でも愛理は、努力して一代で椿メディカルと肩を並べる大企業を作り上げた父を誇らしく思っている。

「私は、父を尊敬していますし、自分の家を恥^はじていません。賢悠さんも、二藤の家柄について気にしていないと思います」

彼が気にしていない以上、愛理も気にするつもりはない。そう胸を張る愛理に、笹から手を離し

た昭吾は遠くに視線を向けて言う。

「そんな怖い顔をしなくても大丈夫だ。賢悠は真面目で優しい子だから、椿原の責務として約束は果たさず。……たとえそれが、自身や椿原の名を貶^{おとし}めることになろうとも」

「そんな……」

あまりの言われように二の句が継げない愛理に、昭吾がゆっくりと視線を向ける。

「そういえば、NF運輸は大変なことになっているようだね」

「絵画の件でしょうか？」

急に話題が変わったことに戸惑いつつ愛理が聞くと、昭吾が深く頷く。

さつき鷺坂も口にしていた絵画の件とは、少し前にNF運輸が受けた絵画運搬の際に、その絵画を破損したと云う争論になっている件のことだ。

普段は遠く海の向こうの国営美術館に所蔵されているルネサンス期の有名な絵画が、特別に海外に貸し出されることになった。そこで、独自の除振システムを開発し、美術工芸品の安全な輸送に定評のあるNF運輸が輸送を任された。ところが、輸送後に学芸員が破損チェックをした際、先方のコンディションレポートには記載されていない傷が発見されたのだそうだ。

輸送に同伴してきた美術館の学芸員は、輸送時についていた傷だと言いつ張った。しかし、事前に送付された写真には、問題の傷らしきものが既に写っているように見える。それを指摘するが、先方は傷ではなく影だと言いつ張り、NF運輸か搬入先の日本の美術館が破損したのだと主張した。

もちろんNF運輸は自分たちの仕事にミスはなかったと主張するし、日本の美術館の学芸員も同

様で、三者の主張は平行線を辿っていた。

しかし、絵を所蔵するのは政治情勢が複雑な国で、こちらの主張にいつさい耳を傾けることなく、国に政治的圧力をかけてまで自分たちには非がないと言ってきた。その結果、N F運輸は国際的な裁判を抱える形となってしまったのである。

茶会の前に父と賢悠が話題にしていた「訴訟」も、このことを示していたのだと思う。ただ……「その件はまだ裁判中です。もし万が一、こちらの主張が通らなくても、損害は保険から支払われます」

だから心配はいらないと、愛理は父から聞かされている。

父の言葉をそのまま告げる愛理を見て、昭吾は、全然わかっていないと言いたげに首を横に振った。

「これだから世間知らずのお嬢様は……」

「それはどういう意味ですか」

思わず反論しようとした愛理に対し、昭吾は自分の唇に人さし指を添える。

そうやって愛理を黙らせてから口を開いた。

「三流会社に勤めて世間をわかったような気でいても、経営についてなにもわかっていない。保険は、この件で失った信頼までは補填してくれないんだよ。今はまだ周囲も様子見だろうが、これで裁判に負けるようなことにでもなれば、N F運輸に依頼する美術館は激減するだろうね。おそらく既に、依頼のキャンセルが出ているのではないかい？ そうなれば、N F運輸の経営は一気に傾く

だろう」

そう語る昭吾の声は確信に満ちている。彼の声色から、可能性の話ではなく、現実にかけていることの話をしているのだと察せられた。

「……っ」

「二藤君は、せめて娘の嫁入りまでは持ちこたえようと考えているのかもしれないが、名家の結婚というものは、嫁いだ後も家同士の付き合いに金がかかり続ける。彼はその資金をどこから調達する気なんだろうね」

言葉もなく視線を落とす愛理に対し、昭吾は一度呼吸を整えてから言葉を続ける。

「こんなことを言いたくはないが……君は、親にそんな負担をかけてまで、息子と結婚したいかね？」

「それはっ」

そう言われて、ここしばらくの疲れた父の顔を思い出す。

物語のような奇跡を信じ、これまで人生の苦難を楽しんで乗り越えてきた父だが、今回の件は愛理が想像している以上に応えているのかもしれない。

「それとも、この先かかり続ける諸々の費用を、自分の稼ぎだけでどうにかできるとでも？」

悔しいが、それは難しいと認めるしかない。

結納の日のためにと両親が仕立ててくれた着物だけでも、愛理の年収を軽く超している。この先、結納、結婚と話が進めば、家に相当な金銭的負担をかけることになるだろう。

心配ないと言う父の言葉を真に受け、深く考えてこなかった自分を恥ずかしく思う。全身全霊で自分を愛してくれた父を思つて唇を噛む愛理に、昭吾が追い打ちをかけるように言う。「それに、君と賢悠が結婚した後、もしNF運輸が倒産でもすれば、その累は椿原の家や椿メディカルにも及ぶ。君はそれを承知しているかい？ きつと息子は、全て承知の上で君との約束を果たそうとしているのだろうか」

そう言つて、昭吾は大きくため息を吐いた。

「名家の結婚とは、互いの家や会社をさらに繁栄させるものでなくてはいけない。だが君たちは、やつと経営を立て直した椿メディカルの足を引っ張るだけだ」

「そんなつもりは……」

「ないと言うのなら、それは君が無知なだけだ。過去に受けた融資に恩義を感じている息子は決して言わないだろうが、ろくに花嫁修業をすることもなく、社会人ごっこなどをしている君と結婚するだけでも、十分椿原の「面汚し」になるというのに」

突き付けられた厳しい現実には打ちのめされ、愛理が呆然と立ち尽くす。

自然と視線が下がっていく愛理の首筋に、夏の風が触れる。

どれくらい経ったか、昭吾が「一つ提案があるのだが」と、優しく語りかけてきた。

その声に顔を上げると、夏の日差しの下、頬や額の皺を濃くした昭吾と目が合う。

「もし君が、賢悠との関係を白紙に戻してくれると言うのであれば、二藤家から受けた融資以上の金額を支払う用意がある。正式な結納を交わしたわけではないが、これまでの付き合ひもある。今

後のNF運輸の立て直しにできる限り力を貸そう。お父さんを尊敬するというのであれば、君が選ぶ道は一つなんじゃないかな？」

「……」

——私は、賢悠さんが好き。

好きだから結婚したいし、彼が側にいてくれると幸せな気分になれる。

でも、自分が幸せになるために、親に負担を強いるのは正しいことなのだろうか……

それだけでなく、自分の存在が賢悠の足を引っ張ることになったら。

「正しい選択のできる君は、聡い子だ。息子には、私から話しておくよ」

表情から愛理の心がどちらに傾いているのかを察し、昭吾は満足げな笑みを浮かべて離れていく。

一人その場に残された愛理は、笹の枝先で揺れる短冊を見上げた。

紙縊りで笹に結ばれた短冊は、風に身を委ね、優しく揺れる。

もし急に雨が降ったり、激しい風に晒されたりすれば、紙縊りは切れ、笹と短冊の繋がりも途切

れてしまうことだろう。

そんな儂い存在に、人は毎年、無数の願いを託す。

二十年、信じてきた賢悠との未来が突然閉ざされた今の愛理には、笹に揺れる短冊がことさらい
じらしく思えてしまう。

——願う自由だけは、許してください。

心で祈り、そつと一枚短冊を取り願い事を書くとその場を離れた。

顔見知りと談笑していた浩樹は、庭を歩く愛理の硬い表情を見るなり、なにも言わず帰り支度を始めた。

タクシーの手配をするという浅井の申し出を断り、賢悠に声をかけることなく逃げるように椿原家を後にするのは、ひどく惨めな気分だった。

「タクシー、どこでもいいな？」

一応といった感じでそう確認し、通りに出た浩樹はスマホのアプリでタクシーを手配する。そして、愛理に気遣わしげな眼差しを向けた。

「誰かに、なにか言われたのか？」

顔を見ただけでそう察するのは、浩樹にも思うところがあるからだろうか。そんなことを考えつつ、愛理は質問に質問で返す。

「裁判は順調？ 業績が悪化したりしていない？」

親子だからこそその遠慮のない問いかけに、浩樹の顔が一瞬だけ強張る。その表情を見れば、鷺坂や昭吾の言葉に嘘はないのだと理解できた。

「乗り越えられない苦境はない。人生と一緒に、常に業績が右肩上がりで順風満帆な商売なんてないさ。そんな屈のような生き方は、つまらないだろう」

今の苦境も人生の醍醐味と鷹揚に笑う父の姿に、愛理もそっと目を細めた。物語のような奇跡は起きると信じ、強い信念を持って会社を急成長させてきた父らしい言葉だ。

愛理に願えば奇跡は起こせると語り、何不自由のない人生を送らせてくれた父。守られることが当然と思いつき込み、現実と向き合ってたこなかつた自分を恥ずかしく思う。父を尊敬するからこそ、父のようにきちんと現実と向き合える人になりたい。そしてこれ以上、大好きな父に負担をかけ続けるわけにはいかなかった。自分の中で覚悟を決めた愛理が視線を上げると、ちょうどタクシーが到着するのが見えた。

「本当に、便利な時代になったな」

スマホの位置情報から、現在地近くの空車タクシーを手配してくれるアプリをよく使う浩樹は、ことさらに明るい声を出す。

それが自分を気遣ったことだとわかるからこそ、ここで涙を見せるわけにはいかない。

先にタクシーに乗り込んだ愛理は、シートベルトを締めると、続いて乗り込んだきた浩樹に言った。

「賢悠さんとのことで、少し、考えたいことがあるの」

「なにを悩んでいる？」

「……」

婚約解消する。……そう覚悟を決めたはずなのに、心がその言葉を口にすることを拒んでしまう。「ちゃんと自分が正しいと思う道を選ぶから、少しでも時間をちょうだい」

今は、そう告げるのがやっとだった。

これ以上話すと泣いてしまいそうで、愛理は浩樹から目を逸らし車窓に顔を向ける。

その姿に追及を諦めた浩樹は、タクシーの運転手に行き先を告げた。



椿原家の茶会から三日後。昼休みに人気の少ないオフィスで私物のタブレットを操作する愛理は、そつとため息を吐いてペットボトルのお茶を飲んだ。

冷房で空気が乾燥しているのか、自分が思うより喉が渇いていたことに気付く。

喉が潤う感覚に一息吐き、愛理はまたタブレットの文字を読んでいった。

「私、本当になにも知らなかったんだ……」

タブレットで閲覧しているのは、株式投資をしている人が趣味を兼ねて様々な企業の評判を書き込んでいるサイトだ。

茶会の日から今日まで、愛理は時間を見つけてはNF運輸の評価について書かれた記事を読み漁っていた。

評価を読めば読むほど、鷺坂や昭吾の言葉が本当だったのだとわかる。

件の裁判は思った以上に長引き、周囲のNF運輸に対する目は目を追うごとに冷ややかになっていった。

現在のNF運輸は、事業縮小もあり得る、創業以来最大の危機に立たされているようだ。

それでも浩樹は弱気になることなく、精神的にこの危機を打開すべく奔走しているが、その顔を

見れば、未だ状況は厳しいのだとわかる。

父の助けになりたいと思っても、大した力のない自分にできることなど高が知れている。

就職して一人前の大人になった気でいたが、実際は、無知で世間知らずなのだと思ひ知らされた。

——きつと、婚約を解消してよかったんだ……

こんな自分を妻に迎えても、賢悠のためにはならなかっただろう。それに、婚約解消することで得られる椿原の支援があれば、父の負担を減らすことができる。

信じていけば、物語のような素敵な奇跡が自分にも起こると思ってきたけど、やっぱり現実はそのんなに簡単じゃないようだ。

でも、彼といた二十年、十分すぎるほど素敵で幸せな夢を見せてもらった。

だからもうこれで終わりにしよう。

賢悠への思いを断ち切るべく、愛理は毎日貪るように様々な記事を読み、自分の判断は正しかつたと言いつ聞かせる。けれど、心がなかなかそれを受け入れてくれない。

情報を読み漁りながら、頭のどこかで、自分にできる起死回生の策はないかと考えてしまう。

そんな奇跡、自分に起こせるはずがない。冷静な部分ではそう理解していても、奇跡を起こすことで、賢悠との関係を取り戻せればいいのにと願ってしまうのだ。

「……っ」

油断すると、すぐに後悔が押し寄せてきて泣きたくなる。

グツと下唇を噛んでタブレットに打ち込む検索キーワードを考えていると、画面に影が落ちた。

不思議に思つて顔を上げると、後頭部になにかが触れる。それと同時に、横から伸びてきた腕が愛理の手からタブレットを取り上げた。

「えっ」

タブレットを追いかけ、腰を捻ひねつて背後を見上げた愛理は、すぐ後ろに立っていた人の姿に目を丸くする。

「賢悠さんっ!？」

驚いて体を引こうとするが、デスクと賢悠の間に挟まれていてそれもできない。

「ど、どうしてここに？」

もう会うことはないと思つていた賢悠が、目の前にいる。そのことに動揺する愛理をよそに、賢悠は取り上げたタブレットの画面をスクロールし表示される内容を確認していく。

「カクミの専務と昼食を取る約束をしたから、そのついでに挨拶あいさつに来たんだよ。お前、この前の茶会、俺になにも言わずに帰つただろ。あれから、連絡しても返事もなし。こんなくだらなさいト読んでる暇があるなら、電話してこいよ」

不満を漏らしながら一通り画面をスクロールさせた賢悠は、タブレットを愛理に返す。

「ごめんささ」

お茶会の日以降、賢悠からの電話やメッセージは全て無視していた。

動揺しつつ謝る愛理の前髪をクシャリと撫でて、賢悠が微笑む。

蝶ちやうを誘う花のような微笑みを向けてくる賢悠に縋すがり付きたい衝動に駆られるが、それをグッと堪こら

える。

もしかして賢悠は、昭吾からまだ話を聞いていないのだろうか……

そんなことを考えながら見上げると、不意に表情を引き締めた賢悠が愛理に顔を寄せてくる。

——近……ッ。

少し首の角度を変えれば唇が触れそうな距離に、戸惑ってしまう。

愛理の緊張に気付くことなく、賢悠は鋭い眼差しで問いかけてきた。

「父に、お前から婚約解消の申し出があったと聞いた。本当か？」

賢悠には自分から話すと言っていたが、婚約解消についてそのように説明されたのだと知る。

「しかも表向きには、椿原から婚約破棄を申し出た形にしてほしいと頼んだとか」

「あっ……えっと……」

昭吾と賢悠の間でどんなやり取りがあったのかわからず、すぐに言葉を返せない。

「原因はそれか？」

そう言つて、賢悠は愛理が胸に抱えるタブレットをチラリと見た。

「そういうわけじゃ……」

思わずタブレットを隠すように強く抱きしめ、愛理は首を横に振る。

真剣な表情で愛理の答えを待っていた賢悠は、綺麗に整えていた前髪を苛立たしげに掻き上げた。

「本気で俺との婚約を解消したいのか？」

賢悠が、射貫くような眼差しを向けて問いかけてくる。愛理の心を貫くような眼差しに、気持ち

が揺さぶられてしまう。

「……」

無理矢理苦いものを呑み込むように、愛理は無言で頷いた。

すると、賢悠が面倒くさそうに息を吐く。

「そうか、わかった。もういいよ」

冷めた口調でそう返すと、賢悠は姿勢を直した。

そして「じゃあな」と軽く手を挙げて、戸口で待っていた専務とオフィスを出て行く。

あっさりした賢悠の態度に拍子抜けすると同時に、彼にとっての自分の存在の軽さを思い知らされ泣きたくなる。

世界が崩れていくような焦燥感に涙ぐむ愛理は、タブレットの記事を読みふけるフリをして涙が引くのを待った。

重い気持ちのまま午後の業務を終えた愛理は、自宅のあるタワーマンションのエレベーターに乗り頬を揉む。

彼を諦めると決めたはずなのに、少し言葉を交わしただけで決心が揺らぎ、時間を巻き戻せたらいいのにと泣きたくなる。

茶会の日以降、家族は賢悠の話題に触れることはない。

両親の性格からして、愛理の判断に任せて、成り行きを見守ってくれているのだろう。

でも二人が心配してくれていることも、愛理がふさぎ込んでいる理由を察した父が責任を感じていることも伝わってきていた。

——こんな顔で帰ったら、また心配させちゃう……

そんなことを考えている間に、直通エレベーターが最上階のペントハウスに到着する。

エレベーターを降りた愛理は、どうにか気持ちを立て直して玄関ホールへ向かう。そして、玄関に揃えられている男物の靴を見て首をかしげた。

——あれ、東条さんが来てるのかな？

父の靴より幾分大きく、洒落たデザインの革靴に、そんなことを思う。

東条は、NF運輸の社員だ。年の頃は三十代半ばだが、年齢に見合わぬたたかさがあり、父が信頼を寄せている切れ者だ。

「ただいま戻りました」

そう言っただけでリビングに入った愛理は、室内の光景に呆然とし、肩から提げていた鞆を床に落とした。

落ちた鞆から飛び出したスマホが、カシャンと硬質な音を立てて大理石の上を転がる。

その音に、リビングのソファにいた三人の視線が愛理に向く。

「えっ……なんで……」

落ちたスマホを気にする余裕もなく、愛理は口をパクパクさせて、ここにいるはずのない相手を指さす。